

ヴィレッジ (THE VILLAGE)

2004(平成16)年8月26日鑑賞(試写会・厚生年金会館芸術ホール)

★★★★



監督・脚本・製作=M.ナイト・シャマラン/出演=ホアキン・フェニックス/エイドリアン・プロディ/ブライス・ダラス・ハワード/シガニー・ウィーバー/ウィリアム・ハート/ジュディ・グリアー (ブエナ・ビスタ・インターナショナル (ジャパン) 配給/2004年アメリカ映画/108分)

……深い森に囲まれて、外の世界から完全に遮蔽された地上のユートピアのような「ヴィレッジ」には掟があった。その第一は、「決して森の中に入ってはならない」というもの。シャマラン監督が『シックス・センス』『アンブレイカブル』『サイン』に続いて放ったミステリーは今回も新鮮な驚きがあり、「ストーリーの全貌を明かさない」との誓約書の提出にも、それなりの合理性が……。期待の新星ブライス・ダラス・ハワードは一見の価値あり！

🎬 定着したシャマラン・ワールド！

シャマラン監督の『シックス・センス』(99年)には、多くの人々が新鮮な驚きを覚え、あちらこちらで大きな話題となり、「いつ、……に気づいたの?」「ええ! そうだったの?」という声に満ちあふれていた。そのシャマラン監督は、1970年のインド生まれとのことだから、ちょっと変わり種(?)でまだ34歳。すごい才能だ。もっとも、『シックス・センス』に続く『アンブレイカブル』(00年)も『サイン』(02年)も似たようなスリラー(ミステリー)モノで、いわば謎解きゲームのようなシャマラン・ワールドの連続。したがって、シャマラン監督の映画には、「映画(ストーリー)の結末を人に話さないで下さい」という注文がついて回ることになる。今回の『ヴィレッジ』は、それがエスカレートし、試写会場に入場するについては、「ストーリーの全貌については明らかにしません」という誓約書へのサインが必要という異例のスタイルだったが……。

最初から神秘的なシーンの連続

過去の作品からも、あるいは前宣伝からも、この映画が謎解きゲームの要素をはらんでいることはわかっている。そして、この映画もそんなシャマラン・ワールドに観客を導くべく、姿を見せることなく忍びよってくる見えざる恐怖やさまざまな伏線を断片的に提示することによって、観客に対して「さて次は何が起こるのか？」と考えさせる神秘的なシーンが連続する。またその効果を深めているのがバックに流れる音楽。音楽が、その不気味さを飛躍的に増幅させていることは明らかだ。「他の人よりも早くその謎を解いてやろう」と思って観ている人も多いかもしれないが、私に言わせると、そんな見方は邪道。この映画（に限って）は、シャマラン監督が「ヴィレッジで伝えたかったのは、古典的なラブ・ストーリーなんだ」と言っているように、私もかなり説得力のある恋愛ドラマだと思う。

ヴィレッジは「空想的社会主義」の理想郷！

深い森に隔てられた別世界にあるこのヴィレッジの人口は約60名。なぜ、この村が「成立」したのか？ それはストーリー展開に大きく影響するので、ここに書くことはできないが、この村の「運営」をリードするのは、10名足らずの「年長者たち」で、そのリーダーがエドワード・ウォーカー（ウィリアム・ハート）。この村には貨幣はなく、すべて自給自足で外界とは完全に遮断されている。だから、年長者たちはその世界に慣れていても、若者や子供たちの第2、第3世代に、この生活がどう映っているのかは微妙なところ……。

この村が存在するのはペンシルヴァニア州で、その時代は1897年。マルクスの「共産党宣言」が衝撃的に発表されたのは1848年。そして、私の昔（学生時代）の「勉強」によれば、マルクスの盟友であるエンゲルスの名著『空想より科学へ』（大内兵衛訳・1946年・岩波文庫）は、それまでの、サン・シモン、フーリエ、ロバート・オーウェンらの「空想的社会主義」の検討のうえに、これをユートピア的な理想郷であって、現実性のないものだと批判し、それにかわる「科学的社会主義」の必要性と、社会主義への不可避的な移行を論証した書物（のは

ず)。この映画を観ていると、そこに描かれている60名のこの村は、まさにこの空想的社会主義として描かれたユートピア社会を彷彿させるもの。

鍛冶職人のルシアス・ハント（ホアキン・フェニックス）はもちろん、ちょっと精神のバランスを欠いたノア・パーシー（エイドリアン・プロディ）であっても、村の中の若者や子供たちは、親の教育どおり、「邪悪なもの」に背を向け、家族のような強い絆で結びつき、互いに助け合いながら自給自足の理想的な共同体を形成しているように見えたが……。

ヴィレッジの3つの掟とは？

もちろん、このヴィレッジの中には憲法も法律もない。ごく自然な人間としての助け合いの気持だけで維持されている共同体だ。「汝殺すなかれ」からはじまる、モーゼの「十戒」のような「刑法」も存在しない。しかし、このような理想郷を維持していくためには、当然、いくつかのルールが必要。それが、この映画のテーマとなっている3つの掟だ。

その第1の掟は、いわば国際関係に関するもので、「その森に入ってはならない！」というもの。江戸時代の日本と同じ、いやそれ以上に徹底した「鎖国政策」の貫徹ということだ。

第2の「不吉な赤い色を、封印せよ！」は、いわば国民に命令をする国内法であり、第3の「警告の鐘に注意せよ！」は、いわば警戒情報の伝達だ。このように3つの掟はいずれもユニークな内容だが、その性格や位置づけには大きな違いがあるもの……。

シャマラン監督の好む（？）カラー分類

2つ目の掟にみられるように、この村では赤色は凶で絶対ダメな色。中国人や中国共産党の幹部がこの映画を観たら怒るかもしれないが、それはさておき……。この映画では、この赤色がさまざまなシーンで凶を誘う不吉な色として使われている。逆に吉は黄色。だから村人が森との境界線付近を歩くときには、頭まですっぽりとかぶる黄色のマントを着ることが不可欠。

この試写会終了後には、この映画に再三登場した黄色のマントに似た、ビニー

ル製のレインコートがすべての観客にプレゼントされたほど（もちろん安モノだが……）。特定のカラー分類によって、ストーリーに神秘性をもたせる手法は、シマラン監督の定番（？）だが、やはり赤は血を連想させるためか、ミステリー作品ではどうしても不吉な色になってしまうようだ……。

ユートピア内の恋愛模様

わずか60名のヴィレッジだが、その中でもやはり若者たちの恋愛模様（？）はさかん。というより、それがこの映画のストーリーの基本となっている。恋愛模様に登場する女性はいずれも、エドワード・ウォーカーの娘たちで、長女のキティ・ウォーカー（ジュディ・グリアー）と次女のアイヴィー・ウォーカー（ダラス・ハワード）。この映画のヒロインがアイヴィーであることは、前宣伝でわかっていたが、実はこのアイヴィーは、ほとんど盲目の少女。この2人の少女と、前述の2人の村の若者との間で、恋愛模様が展開されるが、その中、この村ではかつてなかった大惨劇が……。そして、それがさらに次の事件を呼び物語は次々と展開していくことに……？

期待の新星、ダラス・ハワードの名演技

盲目の少女ながら、意志力の強い、そしてストーリー構成上、重要な役割を果たすヒロイン役を演じたのはダラス・ハワード。『ビューティフル・マインド』（01年）でアカデミー賞を受賞した監督ロン・ハワードの娘で、芸能一家に育ったダラス・ハワードは、小さな役柄での出演はあったものの、本格的なハリウッドデビューはこの映画がはじめて。盲目の少女にもかかわらず重要な役割を引き受け、さまざまな事件の発生や出会い（？）に翻弄される中で立派にその役を果たすという、難しいヒロイン役を実に見事に演じている。一度観れば忘れられない強い印象を残す女優であり、この映画でのアイヴィー役＝ダラス・ハワードというイメージが強く残るのではないかと思われる。これからの活躍が楽しみな新星の登場だ。

2004(平成16)年 8月27日記